

9 0 8 4 共産趣味と
化した世界

ryanzi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

似非ユートピア注意！

ちなみに作者は共産趣味をちよこつとだけかじっているだけです！

Soviet Fantasyです！

Science Fictionではありません！

この物語の前日譚(?)であるThey were innocentも併せて読んでください！

目次

数千年の眠りから覚めると・・・

1

91世紀

原始的な、あまりに原始的な・・・音声案

内

11

The Humans that He

ard Love at the En

d of the World | 16

数千年の眠りから覚めると・・・

「・・・致死性横隔膜痙攣、ですか？」

「ええ、あと五十回ぐらいで死にますね」

伊藤信義は病院に来るまでに五十回も横隔膜の痙攣を経験した。

「はつきり断言します。今の時代では治療不可能です」

医者は残酷な事実を告げた。

「・・・そうですか」

彼は独身であつた。既に両親も他界していた。

後悔がないといえは嘘になるが、どうしようもなかった。

「・・・一つだけ方法があります」

「なんですか？」

「私の知り合いが開発したもので、まだ公開されてはいませんが・・・」

医者はある技術の存在を信義に言った。

「・・・いいでしょう、それに賭けてみます」

「・・・ありがとうございます」

「すまない。こんなものの実験台にしてしまった」

男は申し訳なきように言った。

「大丈夫ですよ、それよりも早くやったほうがいいんじゃないですか？」

信義には残り二十五回しか残されていなかった。

「そうだな。じゃあ目を閉じてくれ」

信義が目を閉じた途端、レバーが引かれる。

信義が入っていたケースは一瞬で凍結する。

「・・・史上初の冷凍睡眠がこんな形で行われるとはね」

男の名は清宮守。

人類で初めて冷凍睡眠を実用化した男だった。

信義が眠りについていてる間、色々であった。

そう、とにかく色々であったのだ。

虐殺○官も真つ青なことがあったのだ。

華氏401度も真つ青なことがあったのだ。

共産『趣味』者の大弾圧である。

これは世界中（日本と一部国家除く）で発生した。

断じて共産『主義』者の大弾圧ではない。

だんだんと共産趣味者の定義は曖昧となった。

（日本の）共産趣味者が淫夢語録を使うことから、同性愛者は共産趣味者と認定された。

共産趣味者は特定のゲイビデオ出演者を玩具にするから、同性愛を馬鹿にするものも

共産趣味者と認定された。

共産趣味者は平等を訴えることから、平等主義者は共産趣味者と認定された。

共産趣味者は不平等を是認しているから、そういったものも共産趣味者と・・・。

キリがなかった。そして、驚くべきことに、そういった弾圧をするのは国家ではなく

市民団体だった。

なぜ、このような弾圧が行われたのか。それは日本で起こったある事件が原因だったが・・・。

それはまた別の機会に話すとしよう。

ともかく、何千年もの時が過ぎ去ったのだ。

信義は見知らぬ病室で目を覚ました。

「・・・生きてる？」

彼は自分の頬をつねる。痛い、ここは現実だ。自分は生きているのだ。それと同時に、医者らしき男が入ってくる。

「おはようございます。そして、9084年にようこそ。伊藤信義さん彼の言ったことを理解するまでに、数秒という時間を要した。

ふと、どこからか「デエエエエ」という音が聞こえてくる。

91世紀

「・・・9084年?そんな時代まで眠っていたのか」

「ええ、致死性横隔膜痙攣の研究はだいぶ遅れてしまっていたのです。安心してください。すでにあなたの手術は済んでいるので」

信義の時代でも致死性横隔膜痙攣を発症する者は少なかったため研究が進まなかったのだが、それでも何千年という時間が費やされたという事実は信じられないものだった。

「まあ、その話に関しては自分の目で確かめた方がいいと思います」

医者が指を鳴らすと、ベッドの横の机に0と1の集合体が現れ、それは瞬く間に食パンとジュースに変化した。

「今の時代はデジタル情報を物質に変換できます。まずは腹ごしらえをしてください」

信義はパンを一口かじる。信じられないほど柔らかい食感だった。ジュースを喉に流し込む。とてもやさしい甘さだった。

「ものすごく、おいしいです」

信義は今までこんな食事をしたことはなかった。

「食事が済んだら、外を散策してください。今の時代をその目で確かめるのです」

食事が終わり、病室から出る。

廊下にはロボットと人間が歩いている。

とどこどこに見慣れない文字があるが、どういうわけか意味は理解できた。

「伊藤信義さんですね？」

エントランスホールで青髪の女性に話しかけられた。

「私はガイド係のリイナといいます。今日は信義さんの案内を務めさせていただきます」

「よ、よろしく願います」

信義は心の中で驚いていた。あまりにも自然な青髪だった。

21世紀でも髪を染める者はいたが、不自然なものだった。

だが、目の前の女性の髪の色はとても自然だった。

「あつ、やっぱり驚いていますよね」

女性は自分の髪を指し示して笑った。

「今の世界ではDNAレベルでの染髪が可能なんですよ」

「そ、そうなんですか」

余計に訳がわからなくなった。

「さて、それではこれを身に着けてください」

信義に手渡されたのはリュックサックだった。

普通のリュックサックと違うのはシヨルダー部分にいくつかのボタンがあることだった。

「ボタンを押せば飛ぶことができますよ」

「そうですか・・・えっ?」

「さあ、とにかく外に出ましょう。ようこそ、91世紀へ!」

信義は女性に手を引かれて、外に出た。

目の前に広がったのは、未来世界だった。

かつての東京スカイツリーの倍以上の建築群、空に数百以上も浮かんでいる映像広告。空を行き交う宇宙船と人間たち。

だが、それ以上に信義の目を引いたのは、病院で見た奇妙な文字と、奇妙なシンボルマークだった。

その文字は日本文字とハングル、そしてキリル文字を混ぜたようなものだった。だ

が、どういうわけか何が書かれているのが理解できてしまうのだ。

そして、ビルの上にも映像にもある奇妙なシンボルマーク。鎌とハンマーが交差しているデザインのマーク。

信義はそれをどこかで見たことがあった。そう、かつてのソ連の国旗のアレだった。

「あの、リイナさん。あの文字とマークは……」

「やっぱり気になりますよね。……信義さんは大弾圧時代直前の人でしたよね」

「大弾圧？」

「あつ、それはまだ気にしないでください。とりあえず、あの文字に関してはその時代の直後に作成されたモノなんです。当時最先端の精神科学を取り入れたもので、認識技術で誰でも本能的に理解できるような文字だと思ってください」

「わかりました。……それでは、あれは何ですか？」

信義は鎌とハンマーを指差した。

『鎌と鎚』ですね。信義さんからすると不吉なシンボルかもしれませんが、私達にとっては幸運のシンボルみたいなものですね。それを説明するには……あそこに行つた方がいいかもしれませんね。ちよつとボタンを押してください」

信義は言われたとおりにボタンを押す。すると、シヨルダーから魔法陣が展開された。

「えっ、魔法？」

「ええ、魔法ですよ」

信義は宙に浮いた。

「私も学校でまじめに勉強しなかつたので、原理はそれほどわからないんですがね。とりあえず付いてきてください」

リイナについて行って十分ほどである場所に着いた。

『東京大弾圧公園』

そこには手を模したモニュメントが数多くあつた。

そのほとんどが天を仰いでいるかのようだった。

「そのこの浮遊ウィンドウに触れてください」

S Fアニメに出てくるような、立体的に浮かんでいるウィンドウがあちこちにあつた。

ウィンドウに触れると、そこから「デエエエ」という音が響き、音楽が始まる。

「これソ連国家じゃないですか」

「そうですよ？」

そして、音声案内が始まった。

『・・・20×年、当時、日本は移民問題、消費税、外交問題・・・そういったことによつ

て世論が分裂していました』

確かにそうだったな、信義は思い出した。

『ですが、当時の同志たちはどちらにもつくことはなく、孤独な戦いを続け、〈選挙は参加することに意義があるんだ、だれに投票するかは二の次なんだ〉のスローガンのもと、ついに共産党政権を成立させることに成功しました』

「えっ?」

音声案内は続く。

『しかし、それは世界各国の市民団体の反感を買うこととなりました。そして、〈大弾圧時代〉が始まったのです』

伊藤信義は話についていけなかった。

原始的な、あまりに原始的な・・・音声案内

『・・・もともと共産主義に対する恐怖は存在していましたが、それとはまた別の理由で彼らは同志たちを危険視しました。彼らは同志たちを得体のしれないナニかと思なしました。無理ありませんでした。特に現在の朝鮮半島南部に位置した大韓民国の市民は、この一連の政変を、自国の安全保障を脅かすものと見なしました。何しろ、日本が共産国家となると周りに味方はいなくなるので』

確かに、信義の時代では韓国の周りには日本以外に資本主義国が存在しなかった。

『そして韓国の市民たちにとって想定外だったのは同志たちが〈米帝万歳〉のスローガンのもとにアメリカとの同盟関係を強化したことでした。こうなると正規軍は手を出せなくなってしまう。そこで韓国市民たちは独自に市民軍を結成して対馬に上陸しました。これが最初の大弾圧である〈対馬大弾圧〉となりました。さて、ここまで説明してあげたので、お礼くらいはしてくれませよね、同志?』

信義は驚いた。音声案内で金をむしり取ろうとしているのだ!

「すみません・・・、この大躍進麦酒を置いてください」

レイラは申し訳なさそうな表情をして、ビール瓶を信義に渡した。

もつと信義は驚いた。音声案内で酒を奪い取ろうとしているのだ!

だが、仕方がない。信義は浮遊ウィンドウの上に瓶を置く。

すると、瓶は1と0の数字に分解され、光の粒となって消えた。

『ありがとうございます、同志。・・・プハア』

「レイラさん、もしかして・・・」

「・・・人間がやってるんです」

91世紀なのに、音声案内だけは微妙に原始的だった。

『ふう、やっぱりこの一杯のためだけに音声案内をやっているんですよね。さて、話を続けましょう。〈対馬大弾圧〉に関しては対馬大弾圧公園に行ったらわかると思います。

さて、この最初の大弾圧をきっかけに世界各国で市民団体が団結するようになり、そして、ついに *anti communist hobbyist committee*、通

称〈反共産趣味者委員会〉が結成されてしまいました。彼らはIT企業と結びつくことによって、独自の裁判システムを築き上げたのです。その裁判は歪なものであり、弁護人はおらず、大多数の市民が裁判官として臨んだのです。結果は・・・大惨事となりました。かつての魔女狩りのように、多くの同志たちが日々処刑されていきました』

信義はぞつとした。〈大弾圧時代〉は自分が眠った直後だ。もし致死性横隔膜痙攣にかかっていたいなかったら、信義は地獄を見ていたに違いない。

『しかし、それに抵抗する国は日本以外にも存在しました。中国、ロシア、朝鮮民主主義人民共和国、ベトナム、キューバといった共産へ主義へ国家です。彼らは反共産趣味運動の抑圧に力を入れ、日本に対する支援を行いました。そして、ついに中国、朝鮮、日本による現在のイースタシア軍の前身である東亜連合軍が結成され、韓国を占領下に置き、対馬は日本に返還されました』

信義からすると半分悪夢であつた。

(何かの冗談か？中国と北朝鮮と日本が協力しただけって？)

『しかし、それは新たな悲劇の始まりとなりました……』

その時、空から光輝く雨粒が降り注ぐ。

それと同時に音楽が響いてくる。

信義は知らないが、それはノルウェー版『赤軍に勝るものなし』だった。

「レイラさん、これは一体……？」

「……『愛の日』の再現です。週に一回くらいのイベントです」

「『愛の日』？」

「音声案内を聞けばわかりますよ」

『困りますよ。あれ説明するの大変なのに』

「おや、シベリアに転勤しますか？キムさん？」

『やっぱりリイナかよ。・・・じゃあ、そこにいるのは』

「ええ、21世紀から来た人ですよ。それも最初の」

『うげ、すごくメンドクサイな。あれすごくオカルトな出来事なのに』

(オカルト・・・?)

結局、リイナがもう一本、大躍進麦酒を渡すことで話がまとまった。

『では、話を再開しますね。A C H Cは一連の出来事を受けて、連合市民軍を結成しました。そして、ついに市民軍は東日本を占領してしまいました。そして、東京大弾圧が始まってしまいました』

声が急に真面目なものになった。

『そのころのA C H Cが定めていた共産趣味者の定義はかなり曖昧なものとなっていました。それにより、本来は共産趣味者ではないはずの同性愛作家や淫夢廚として知られていた同志たちが処刑されました』

「たまげたなあ・・・」

信義はつい語録を口にしてしまった。

『おや、それなら話が早い。本来なら十分くらいは淫夢廚の説明に費やされるはずだったんですが』

(危ないところだった!)

信義もあれに関する説明は聞きたくなかった。

ついでに、あることに気がついた。

「・・・あの、まさか致死性横隔膜痙攣の研究が遅れたのは」

『ええ、西暦4000年まで戦乱が続いたので。大弾圧時代自体は五年で終わったんです。』

「よ、4000年・・・」

千年以上の時を要したのだ。それなら遅れても仕方がないだろう。

「でも、そこまで長く続くような戦いをどうやって終わらせたんですか」

『・・・この野郎』

「キム、そこまでシベリアに行きたいの？」

『わかったよ・・・さつき雨が降っていただろ？』

「はい」

『その雨が降ったおかげで、争いが終わったんだ』

「・・・はい？」

結局、また話についていけなかった信義だった。

The Humans that Heard Love
at the End of the World

西暦4000年

フアウンテーション時間1000年

「・・・最悪だな。ポッドが全部空っぽだよ」

ワグナーは空っぽになった数千の筒の前でヴィクトリー・シガレットに火をつける。

「東亜連合軍第七方面司令部、こちら海洋団結軍第九浮動要塞所属のワグナーだ。A
CHCのスリーパーどもは全員どっかに行っちゃってる」

「了解、そこで待機してくれ」

通信を終えて、シガレットを口にくわえる。

ワグナーは大弾圧直後に生まれた世代だ。

だが、冷凍睡眠による人口維持計画によって、この時代にやってきたのだ。

渥美半島条約は意外にも遵守されていた。

1 : 人道的な目的による冷凍睡眠に対する干渉を禁じる。

2 : 世界遺産地域での戦闘行為を禁じる。

3 : 渥美半島は永久不戦地帯とする。

4 : タケノコはキノコに対する優越権が認められる。

5 : キノコも同様にタケノコに対する優越権が認められる。

6 : 核兵器の使用を禁じる。

人口維持計画は『人道的な目的』なので、ワグナーは千年以上も眠りにつけていた。

なお、彼が今いる場所は、『軍事的な目的』に該当するので干渉が許可される。

ちなみに、今では4と5が何を意味していたのかを誰も知らない。

当然だった。この条約は2084年にアビスタン指導者の呼びかけによって締結さ

れた条約であったからだ。キノコもタケノコも、忘れ去られたのだ。

「ふう、オーウェル様、無事に任務が終わりますように」

ワグナーは神に祈った。共産趣味者は神を信じるのだ。

彼が信じている神は〈ジョージ・オーウェル〉というものだった。

『オーウェルは絶対に誤りを犯すことがなく、全能である。あらゆる成功、あらゆる業績、あらゆる勝利、あらゆる科学的発見、あらゆる知識、あらゆる叡智、あらゆる幸福、あらゆる美德は、彼の統率力とインスピレーションから直接引き出された』

オーウエリアン教の教義にはそうあるが、信者たちは全員それを信じていなかった。むしろ面白がっていた。

オーウエリアン教の信者だけではない。共産趣味者が今までの人類と違っていたのは、自分たちの信じている嘘に対し、かなり寛容だったということだ。

共産趣味者は誰もが自由と平等を求め、もちろん、みんながそれが不可能だと知っている。そして、それを平然と口にすることができるとだ。

そこが共産趣味者とACHCとの大きな違いだった。

「・・・さて、さつきからそこにいるのはわかってるぞ」

ワーグナーは暗闇に向かって言う。すると、中からナイフを持った少女が出てきた。

まだ十代前半だった。

「・・・ACHCの奴ら、やっぱりいかれてるな」

共産趣味者からすると、未成年者を軍人として使用するACHCの感覚は理解に苦しむものだった。

「・・・あと十回、もう死ぬのは怖くない」

少女はそれだけ言った。その口ぶりからして致死性横隔膜痙攣状態であることは明らかだった。

基本的に致死性横隔膜痙攣状態の者をACHCは見捨てていた。

「おいおい、どうせ死ぬんだったら、そんな無駄なことやめようぜ」

ワーグナーはそう言いながら、神経鞭を少女に向ける。

「当たると痛いぞ。ナイフをしまってください」

「・・・死にそんな人に言う?」

「俺だつて刺し殺されたくないし」

「でも、共産趣味者なんでしょ? だつたら殺さない」と

ワーグナーはため息をつく。

「・・・はあ、どうしてお前たちはそうやって俺たちを殺そうとするんだ?」

「わかんない。でも、お母さんもお父さんも殺せつて言つてた」

「・・・いつ?」

「たぶん百年前。・・・ッ!」

残り九回。

「・・・なんで、俺たちいつまでも憎み続けるんだ」

「さあ? でも、この一週間はずつとここにいたから、暇だから面白い仮説が思い浮かんだ。いったん殺すのはやめてあげるね」

あくまでも『いったん』だった。おそらく『回数』が残っていればすぐに刺し殺すつもりだろう。

「へえ、それを今話すのかい。もう時間がないんだろ？」

「もう時間がないから話すの。せつかく思いついたのに、誰にも話せずに終わるのはいやだから」

ヴィクトリー・シガレットの中身が零れ落ちる。

ワーグナーは箱からもう一本取り出して、火をつけた。

「それじゃあ、御高説お願いするよ」

「はい、それじゃあ・・・ッ！」

残り八回。

「・・・それじゃあ、言うね。多分、大弾圧とかが起きたのは、たぶん当時のアンタらがずっと安全圏にいたからだよ」

「・・・安全圏、いったいどういうことなんだ」

「うーん、簡単に言うと、テロの対象にも、迫害の対象にもならない場所かな？」
今の共産趣味者がいる場所とは、まったく逆の場所らしい。

「本当に暇だったから、昔のデータを集めてたんだ。ネットには通じていたから」
ネット、といってもTCP/IPではなく、この時代ではHSだった。

「・・・ッ！2000年代の情報が残っているのはびっくりしたよ」

残り七回。

「昔のアンタらって、本当に何もしてなかったんだよ、悪い事も良い事も。批判も浴びない場所で、レーニンとかスターリンとか、可哀そうなマレンコフとかいうおっさんたちについて駄弁っていて、戯れでラーゲリとかしたり、国歌を歌ったり・・・とつくの昔に滅んだ国に対するノスタルジーを語り合っていただけなんだよ」

そこに関してはワグナーも学習したことはある。

「でもさ、・・・ッ！それが多分、周りの人々の反感を買ったんだよ」

残り六回

「・・・反感？」

「そう、アンタらがそうやってのんびりとしていた間でも、世界は常に動いていた。戦争だったり、テロだったりね。普通の人々は常に危険にさらされた。・・・ッ！たぶん、もうその時点で嫉妬とか反感は芽生えてたと思うよ」

残り五回。

自分たちが日々テロやら政争やら炎上やらで苦しんでいるのに、共産趣味者とされる人々だけがのうのうと安全圏で高みの見物を決め込んでいる。確かにやるせない気分にはなるだろう。

「・・・そんなときに、『共産政変』か」

『共産政変』。日本が内部分裂を引き起こしそうになっていたときに起こった民主的

クーデターだった。

「安全圏でこのうと生きていたアンタらが……ッ！おいしい部分を持つて行つたんだよ」

残り四回。

「そりや確かに怒るな」

ワグナーは先日の事件を思い出す。ショートケーキを食べていたときに、最後に食べようと思つていた苺を同僚に食べられてしまったのだ。多分、それと似たような感じだろう。

「それで、今までの鬱憤が爆発したんだよ」

共産趣味者は共産主義者と同じように、どこか理性的なのだ。だからこそ、人間の理不尽な感情は理解しにくいものに思えた。他人が安全圏にいるというだけで、反感を抱くものなのだろうかとワグナーは疑問に思つた。

「アンタらには永遠に理解できないと思うよ。だつて……ッ！」

残り三回。少女はナイフを向けて近づく。

「だつて、アンタらは普通の人間らしさを失つたんだから、その理性主義とやらで」

「……理性で人間らしさを失う？」

ワグナーは神経鞭をぎゅつと握る。

「感情がなきや、人間らしさを保てないのに、アンタらはそれを人間らしくないからって捨てた」

「でも、君たちACHCも理性を捨てたじゃないか」

「お互い様なんだよ。もう希望なんてない。わかってるでしょ。私達は袋小路に入ってしまったの。アンタらは理性でもって和解を望んでいるけど、私達はあまりにも感情的だから講和は実現しないの。……ッ！あと二回か」

少女の言う通りだった。千年以上続いた戦乱はオーウェルが二千年以上前に予想したように、永久戦争と化していたのだ。

「……それもそうだな」

この後の流れは明らかだった。軍人としての訓練を受けているワーグナーに少女が勝てるわけがない。

そして、少女は間もなく致死性横隔膜痙攣で死ぬだろう。

だが、ワーグナーの通信機から大声が響いた。

「おい、ワーグナー。外に出てくれ！すぐく綺麗な雨だ！」

母を食べやがった同僚だった。

「雨？今そんな事態じゃ……」

「いいから見てみろって！こんな雨、見たことねえよ！」

すごく感情的な、歓喜に満ちた声だった。

「……付いてきてみるか？」

「……ッ！まあ、あと一回だし見てみるか」

ワグナーと少女は地下の秘密冷凍睡眠施設から、地上に出た。その数分間で、最後の横隔膜痙攣がなかったのは幸いだっただろう。

彼らが見たのは金色に輝く雨だった。

「……なんだこれは」

ワグナーの頬に涙が流れる。あまりにも美しい雨だった。

「うわー！なにこれ！すっごくキレイ！」

少女は走り出して、雨を浴びる。

「ワグナー、見てみるよ！『鎌と鎚』だぞ！」

同僚も雨を浴びながらはしゃいでいた。彼の言う通り、雨粒は『鎌と鎚』の形をしていた。

「……ああ！」

ワグナーも外に駆け出した。

「アハハハ！……ッ！」

最後の一回。

「・・・あれ、私、生きてる?」

『雨』は奇跡を起こした。

S I D E：渥美半島、恋路ヶ浜

ここでも『鎌と鎚』の『雨』が降り注ぐ。

「・・・ようやく終わりか」

一人の軍服を着た老人が呟く。

彼の名は本名はもう誰も知らなかった。

<Normalized>名誉元帥、<Normalized>というのは彼がゲーム実況者だったころの名前だ。

大弾圧時代の直後、彼は東亜連合軍の参謀総長となった。

彼は『下水作戦』でA C H Cに壊滅的な打撃を与えたことで有名だ。

そして、冷凍睡眠と延命技術の発達により、今日まで軍人だった。

「ハアツ→w w w!!ハアツ→w w w!!ハアツ……ハアハ→w w w w w」

彼は笑った。ここまで笑ったのは1000年以上も前のことだった。

『雨』に打たれながら、笑った。

「ハア→wwwナンテコトガオキテシマッタんだア→www」

それが最期の言葉だった。

彼は四つ葉のクローバーの草原に倒れこんだ。

SIDE：渥美半島、文明博物館（旧田原市博物館）

エリヤ・ブラウン、彼は最初期からのACHCのメンバーだった。

彼もまた、冷凍睡眠と延命技術の発達により、この時代まで生き永らえていた。

だが、それも今日で終わりだった。

「・・・綺麗だ」

庭園に出て、『雨』を浴びる。

そして、彼は涙を流していた。

「ジョン、それが君の答えか」

そして、そのまま眠りについた。だが、彼の近くにいた者が『ジョン』が誰なのかは
ついに知ることはなかった。

ただ一つ、わかっているのは彼が『雨』が何なのかを知っていたということだ。

世界中に『雨』は降り注いだ。
ある者は言った。

「これは『雨』じゃない。『愛』だ」

世界中に『愛』が降り注いだのだ。

その『愛』を浴びた者たちは、戦いをやめた。ついでに致死性横隔膜痙攣が治った。

西暦4000年、ついに戦乱に終止符が打たれた。

これ以降、『国家的戦争』が起こることはなかった。

『愛の日』

いつからか、そう呼ばれるようになった。

この『愛』を浴びた者は全員が共産趣味者となった。

しかも、今までよりも人間らしい共産趣味者に。

『……というのが〈愛の日〉に関する簡単な説明ですね』

「……えっ？」

信義はやっぱり話についていけなかった。